ウルリム
響
울림

聖公会生野センター機関誌

第23号
2002年5月20日発行

題字：康秀峰

E-mail:ikuno.po@nskk.org　URL http://www.nskk.org/province/ikuno

聖公会生野センター10周年を迎えて

竹田　眞

「聖公会生野センター」が今年で創立10周年を迎えます。日本聖公会は1992年総会で聖公会生野センター運営に積極的に参画することを決議しました。このときの決意をセンターに関わる全ての方々とともに再確認する機会にしたいと願っています。

日本聖公会の重要課題は「和解」です、日本と韓国・朝鮮の関係は歴史を振り返れば、和解の達成という課題に直面することは明らかです。ことに在日の韓国・朝鮮の人々との和解の目標は、ひとくちで言えば「共生」ではないかと思います。

共生の達成は同一化を目指すことではありません。それぞれ異なる固有の生き方をお互いに認め合い、お互いに感謝することです。聖公会生野センターの活動は、まさにこの意味で和解を目指しています。長い間その固有性を無視されてきた在日の韓国・朝鮮の人々の本来の生き方を確認し、それを実現できるように協働することです。聖公会生野センターは、そのために在日の人々が本来神の意図されている生き方を実現できる環境を用意するために生野の地域で活動しているのです。その活動の関心は、在日の方々を対象とするばかりではなく、同じように固有の生き方を妨げられている全ての人々に及んでいます。

日本聖公会が聖公会生野センター運営に積極的に参画することは、日本における少数民族を助けるためであると言うよりも、日本聖公会自身も神が意図された真実の生き方を目指すことであるとも言えます。共生とは、お互いに神から与えられた固有の賜物を確認し、その賜物をお互いに感謝しつつ分かち合う生き方だと信じます。

このたび私は聖公会生野センター10周年記念事業の委員長を拝命いたしました。この10年間、センター職員のご労苦とご努力、また、多くの関係者のご理解とご支援に感謝しつつ、無能のものでありますが皆さまのお支えを期待しつつ奉仕させていただくつもりです。

（たけだ・まこと　聖公会生野センター10周年記念事業　事業委員長　前日本聖公会首座主教）

もくじ

1　聖公会生野センター10周年を迎えて ……竹田　眞
2　時のしるし　『インナーネット』 ……西原 廉太
3　多民族・多文化共生のすすめ②　民族学級の制度保障について取り組む理由 ……金 光 敏
4　書評　「在日の言葉」 ……李 裕 憲
5　ハルモニの物語（イヤギ） ……丁　章
6　こんな本あります　本から「在日コリアン」を考える⑨ ……高 二 三
7　韓国市民の眼②　『最新日本史』は「改善」？ ……河 棕 文
8　中国朝鮮族の聖地 ― 延辺朝鮮族自治州 ……全 永 男
9　ご支援くださった方々のお名前
10　お知らせ／余韻

『インナーネット』

西原廉太

パレスチナで起こっていること。今、この時も無数の子どもたちの命が奪われていく。いったい、この地上で、不当な暴力、無意味な戦争によって、子どもたちの命が失われない時は来るのであろうか。そのような世界の現実のただ中にあって、小泉政権は、有事法の法制化を強行しようとしている。私たちはこの流れの中で、ただ座し、茫然としているわけにはいかない。

桜がすでに満開となった3月の下旬の武蔵嵐山で、NCC（日本キリスト教協議会）平和・核問題委員会主催による「平和キャラバン」が2泊3日で開催された。非暴力トレーニングを体験し、ヒロシマの被爆者の方の話を聴いた。丸木美術館で丸木夫妻の絵に込められた思いに圧倒され、多くの強制連行された朝鮮人や中国人が労働を強いられた吉見百穴の地下軍需工場跡の奥深く入った。最終日は、大型バスで川崎に移動し、戸手や桜本を訪れ、在日コリアンの歴史と今に触れた。

こう書くと、よくある現場研修かと思われるかも知れない。しかし、今回の「平和キャラバン」の最大の特徴は、何と言っても＜子どもたち＞が中心に、大人たちも共に経験し、学ぶプログラムであったというところにある。下は1才8ヶ月の女の子から、上は12才まで、10人の子どもたちが参加した。その中には在日コリアンの子どもたちもいる。一緒に、被爆体験をお持ちの天野文子さんの物語を聴いた。吉見百穴では本来入れない奥中で、子どもたちはその暗闇と空気の冷たさを体感した。桜本保育園の保育士である尹卿恵（ユン・ギョンヘ）さんは、絵本の読み聴かせを通して、自らの物語を子どもたちに語ってくださった。そのような体験を、子どもたちは大きな人間の絵を描くことにより表現した。

歴史に触れ、他者の痛みに共感し、自らの立っている地を確かめていくこと。私たちが、私たちの子どもたちに伝えたいことであった。子どもたちは、それぞれに、驚くべき感性をもって、一つ一つの意味を拾い上げていく。天野さんが読んでくださった、「おじいさんにも出来ること」という紙芝居。戦争の悲惨さ、核兵器の無惨さをその身に刻んだある一人の老人が、ふと思い立ち、プラカードを掲げて歩き出す。すると、それならば私にも出来ると、おばあさんが共に歩き出し、孫たちが続き、と気がつけばその列は途方もなく長くつながっていく、というお話である。帰宅後、4才の子どもが、「ぼくにも出来ること」があると言う。何？と尋ねると、「歩くこと。守ること」という答え。何を守るの？と聞くと、「いのちみんなを守ること」、そのために「みんなといっしょに歩くこと」だと言う。また、今回、とても嬉しかったことは、私の子どもたちが卿恵さんの子どもたちとすっかり仲良くなったことであった。概念的にカテゴライズされた「在日をめぐる諸問題」というのではなく、私の子どもたちにとっては、ユリちゃんやソラちゃんたちとの極めて具体的な出会いがすべての出発点となった。この出会いは彼女たちにとって一生の宝物となるはずである。

私たちが、多文化・多民族共生社会を模索し、真の「平和」をこの地上に実現していくためには、こうした具体的な生身の出会いを、世代を越えて繋げていくことが絶対不可欠なのだ、と今確信している。屋久島在住の思想家、星川淳さんは、『インナーネット』という言葉を生みだした。その本来の意味は、地球の生命圏にしっかりと根づいた具体的な繋がりを世代を越えて創造することである。北米の先住民たちは、重大な決定は7世紀後の＜いのち＞を考慮して行うという『インナーネット』を持っているという。この言葉は今後、さらに普遍的に用いられても良いように思う。

私たちも、多様な背景と文化の内にある人々が共に生き、そして子どもたちの＜いのち＞が不当に奪われることのない本当の平和を実現するために、『インナーネット』の網を紡いでいきたいのである。

（にしはら・れんた　中部教区司祭・立教大学教員）

民族学級の制度保障について取り組む理由

金光敏

私は、民族学級の制度保障の必要性について二つの視点から考えている。1つ目は、戦後補償である。民族学級の歴史を詳細に説明することは省略するが、解放後（日本の敗戦後）すぐの朝鮮人社会は、民族教育事業に力を傾けた。解放後わずか3年間に500箇所を超える学校や講習所を開設している。当時の同胞たちの生活状況は、ただでさえ貧しかった日本社会でそれ以上の貧困の中にあったが、同胞たちは力を合わせて「学校」を開設した。

ところが、1948年に文部省が通達を出し、「朝鮮人学校を認めないから閉鎖せよ」という命令が都道府県に出された。同胞たちが、それに闘ったことは言うまでもない。強権的に進められた「朝鮮人学校閉鎖」は、「解放された」民族であるにも拘わらず、「私たちの学校」が再び奪われていくという「無念さ」を同胞たちの胸に刻み込んだ。民族学級の制度保障が戦後補償の一環であると考える所以はそこにある。

2つ目は、普遍的人権の観点である。国際社会で効力をもつ人権条約の中で、「民族教育」を否定する内容は見当たらない。いやそれどころか、「国際人権規約社会権規約」「子どもの権利条約」「人種差別撤廃条約」などの中では、「独自の文化を仲間たちと享有する権利」「親との文化的同質性を保障される権利」「少数者が差別を克服するために必要な措置を受ける権利」が民族的マイノリティにはあると貫かれて明記されている。実際に、「公立学校におけるマイノリティの言語の教育に必要な措置」を行うよう1999年3月の国連人種差別撤廃委員会、同年8月の国連国際人権規約社会権規約委員会が、日本政府に対して「勧告」している。国際社会では、公立学校における「民族教育」の保障を当然のこととして考えているのである。

実は、以上の2点以外にもう一つある。それは、新しく渡日してきた子どもたちのことである。中国やベトナム、南米などから来た彼らの教育は、在日同胞同様に深刻だ。彼らの教育が、"日本語指導"に集約されているため、彼らが日本語を話し始めると、「彼らの課題は解決した」となってしまう。しかし彼らが日本語で流暢に話していても、それは生活言語であり、教科書や授業を理解し、進路の不安について話し、不条理を訴える「日本語」とは全くちがう。また、日本語の習得によって母語を失い、日本語習得が進まない親子間で会話が難しくなったり、自己否定に陥るケースが増えている。これはまさに私たち在日韓国・朝鮮人社会が経験してきたことではないか？

在日韓国・朝鮮人と日本社会が向き合うことは、新しくこの社会の仲間になった人々の人権に直接結びついていく。だから私たち在日同胞はまだまだ闘わないとだめだ。私たちはそれを運命なのだと考え、明るく、楽しく、共生社会の実現に向けてぶつかりたいと思う。

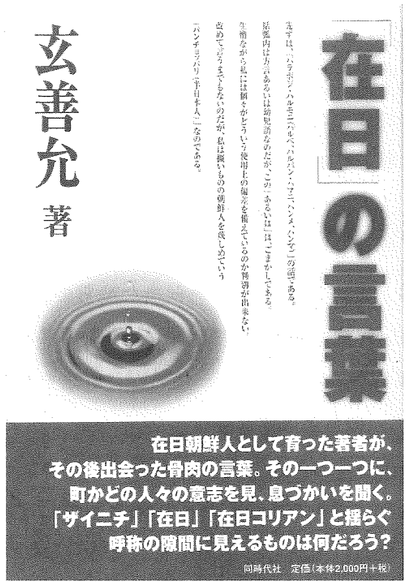
（きむ・くぁんみん　民族教育促進協議会事務局長代行）

書評　「在日」の言葉

李 裕 憲

「在日」の言葉　玄善允著

同時代社
定価 2000円＋税



どうした風の吹きまわしか、日本は空前の韓国ブームである。「近くて遠い国」から「近くて近い国」へ。テレビ、新聞では韓国紹介の特集が組まれ、書店では韓国関係の書籍であふれている。今年はサッカーのワールドカップ韓日共同開催の年でもあり、韓国の街は日本人観光客であふれかえるだろう。この韓日友好は「ホンモノ」なのか。

本書の著者は1950年生まれの在日朝鮮人二世であり、1960年代から1970年代にかけて青少年時代を送っている。「チョーセン帰れ」「チョーセン臭い」と呼ばれた世代である。

あの時代を日本人は忘れたのだろうか。

朝鮮人一世である親たちにはロクな仕事がなく、子どもたちは日本の学校で自らの出自を恥じていた。両親が話す母国語に親近感を持てず、キムチ、ニンニクに嫌悪感を持ち、日本人の目に自分が朝鮮人に見えないように励んでいた。現在も日本国内には日本籍への帰化者も含めると約100万人の朝鮮人・韓国人が住んでいる。日本の植民地時代から現在に至るまで、日本人の身近には多くの朝鮮人・韓国人が共に生活していた。呼称が「鮮人、第三国人、チョンコ、チョーセン、在日朝鮮人・韓国人、在日、ザイニチ、在日コリアン」と変わっても、中身は同じ出自の人たちである。この人たちが日本人には見えていなかったのか。

先進国を自負する日本社会の内実は、戦前と変わらない「脱亜入欧意識」と「単一民族国家観」による「血統主義」である。日本には外国人に関する法律として、人権法ではなく、管理法としての入管法（出入国管理及び難民認定法）、外登法（外国人登録法）だけがある。

これらの法律や社会的差別によって在日朝鮮・韓国人は日本人に成り済ますか、それとも痛い目に会うかの選択を迫られてきた。日本では戦後55年経っても、朝鮮人、韓国人は共生する人たちではなく管理の対象である。

欧米には外国人に関する法律として人権保障法や差別禁止法がある。民主主義の基本は住民自治であり、外国人も同じ市民、住民である。日本は人権法を制定し、在日朝鮮人、韓国人の存在をシッカリと見つめなければならない。子どもは親や国を選んで生まれてくることはできない。本人の責任でないことが原因で著しく差別されるような国や社会は、やはりその国や社会の方が病んでいる。本書に著者の娘が日本の大学入学に際して、本名の母国語よみである「ヒョン・サエ」の名乗るまでの顛末が書かれている。彼女の決意に熱いエールを送りたい。あなたは地の塩、世の光である。　　（い・ゆほん　大阪聖愛教会信徒）

『「在日」の言葉』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno.po@nskk.org

ハルモニの物語（イヤギ）

丁 章

きかせてほしい
ハルモニのことを。
ハラボジはなにも語らずに
逝ってしまわれた。
あなたが語らねば
海の向こうのはらからの地から
わたしたちはぷっつりと切れてしまう

わたしがここにいる原因
ハルモニの苦労と
ハルモニのロマンスを。

傷深いその苦しみが
あなたに語らせまいとして
あなたの朝鮮を
あなたは密封してしまっている。

わたしたちはききたい
ハルモニの物語（イヤギ）。
見たことがない
祖国と歴史に
わたしたちを
つなげてほしい。

ハルモニ　할머니。祖母、おばあちゃん。
ハラボジ　할아버지。祖父、おじいちゃん。

丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住

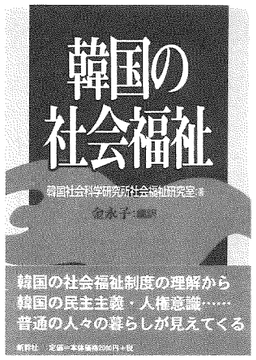
著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）

本から「在日コリアン」を考える ⑨

高　二　三

韓国の社会福祉

韓国社会科学研究所社会福祉研究室・著
（金永子・編訳）
定価2000円＋税
新幹社



新しい学問は活力に満ちていてすがすがしい。日本で「社会福祉学」というとそれほど新鮮味を感じないが、韓国での「社会福祉学」はまさに新しい学問というべきである。研究者たちの熱気を翻訳本でありながら実感できる。

解放後、軍事政権が長く続いた韓国での社会福祉は軍人や警官、そして公務員だけのものであった時代が長かった。それが1980年代の後半以降、日本や欧米の社会福祉に学び、韓国の経済や社会に適する社会福祉のありようを試行を重ねて模索している。全国民を対象に導入されたのもここ数十年なのだから、研究が若いということは、仕方のないことである。だからこそ、冒頭に述べたように活力に満ちているということも言えるのである。

日本で暮らしている私たち（日本人も在日コリアンも）が、あらためて社会福祉について考えることは少ない。多くは、自身が当該者になって、初めて向き合うことになる。だが、そもそも社会福祉とは何だろう？ということをこの本は考えさせてくれる。社会福祉の理念とでも言えようか。

知らず知らず社会福祉は「恩恵」で与えられていると思ってしまったり、自分は補償を受けないのにお金を払うのはいやだ、と思ってしまったりする傾向が強い。だが、もう一度人が生きる社会のありようを考えて見るのもよいのではないだろうか。

私は韓国の著者とは会っていない。編訳者の金永子（キム・ヨンジャ）さんが、結果的には発刊人の代わりまでして、韓国で何回か会って下さった。金永子さんによると本書の著者たちには若い人もいて、自分たちの研究に使命感のようなものを感じているらしい。日本の学界ではあまり聞かなくなってしまったことだ。

昨年11月、私は香川の四国学院大学へ行った。そこで訳者たちとお会いした。訳者たちもみんな若く、これから「韓国の社会福祉学」に関しては日本で第一人者になられる方たちなのだろうなと思った。また鄭秀詰（チョン・スーチョル）さんのようにご自身が障害者でありながら翻訳に参加された人もいる。訳者たちに活力あふれた未来がくることを願いたい。

さて、本書の内容であるが、おおよそ①韓国の社会福祉制度の歴史、②国民年金、③医療保険（健康保険）④国民基礎生活保障法（生活保護）、⑤児童福祉、⑥老人福祉、⑦障害者福祉、概観すると以上のとおりである。とてもオーソドックスな内容である。

近年の韓国ブームで、日本人はずいぶん詳しく韓国を知るようになったとはいえ、社会福祉の実情を知る人は少ない。韓国の福祉の実情を知るという行為は、おいしいものを食べたり、安いものを買ったり、楽しい映画や音楽に接したりetcと比較するとつまらないものかもしれない。

しかし、暮らしぶりを知るということは、そういうことなのだと思う。毎日、額に汗して、黙々と生きている人たちがいる。それぞれ個別には泣いたり笑ったり怒ったりしながら。その暮らしをささえる「社会福祉」こそ、韓国の民度そのものであり、民主主義や人権の座標軸にほかならない。

本書は、図書館の注文や福祉に関わる人々に、じわりと広がり始めている。とても嬉しいことである。

（こ・いーさむ　新幹社代表）

『韓国の社会福祉』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno.po@nskk.org

『最新日本史』は「改善」？

河　棕　文

4月9日、去年の『新しい歴史教科書』に続いて『最新日本史』が姿を現した。去年のものが中学生相手なら、今回のそれは高校生相手である。「教科書戦争」の2002年版の始まりである。

右翼のメインストリームの「日本会議」が後押しをしてきたせいか、86年と94年の2度の実戦経験があってか、新入りの扶桑社の教科書とはどこかが違う。88ヶ所という「間違い」の量もさることながら、あの「つくる会」の荒っぽく直線的な書き方よりずっと洗練された「貫禄」がすぐ目に入る。検定通過までの「情報戦」においても落ち度はなく、教科書の中身が内外に知れ渡ったのは検定を通った当日であった。去年の二の舞はと思って綿密に準備をしたであろう。『最新日本史』は見事にソフト・ランディングに成功したように見える。

韓国政府の反応を見ればそれははっきりする。ワールドカップの成功というカードを出してきたことと、新しく船出する「韓日歴史共同研究委員会」の活動に期待するというのは案の定である。しかし、日本の市民団体から「最悪の教科書」という声があがっているにもかかわらず、幾つかの記述をもって現行本より「改善」されたというコメントをいわれてはこっちの堪忍袋も切れてしまう。

歴史学は事実を考究する学問であり、歴史教育は歴史学の研究成果に基づいて執筆される。事実の確定に際しては当然「評価」ないし「価値判断」の介入は避けられないが、それはあくまでも客観性や普遍的な基準を前提条件とする。歴史学が事実をつまみとるものではないように、歴史教科書の記述も「政治的な取引」の材料ではない。「王妃の殺害」や「神社参拝の強制」などが書かれたからといって、『最新日本史』の有する歴史破壊の度合いが薄まるとは到底思えない。

振り返ってみると、去年の教科書問題の過程ではっきりしたのは、韓日両国政府の「無能さ」であった。既に長い間国内で「歴史バトル」を戦ってきた日本政府はもちろんのこと、韓国政府も自ら「歴史か経済か」の択一として教科書問題を矮小化してしまう。正面勝負は政治的負担が重すぎるから、場当たり主義に走らざるを得ない。そういう両国政府の間では奇妙な「連帯感」すら感じ取れる。

いずれにしても、去年と同じく戦いの本番は韓日の市民が引き受けなければならない。あの「最悪の教科書」の危険性を広く知らせる一方、両国政府の真摯な取り組みを圧迫していくべきである。以上の韓日共闘が功を奏するならば、採択率は0％に抑えられよう。それが本当の「改善」である。

（は・ぢょんむん　ハンシン大学国際学部）

精神科
神経内科
キム診療所
〒537-0013 大阪市東成区大今里南3-13-13
高クリニックセンター3F
TEL(06)6973-8282　FAX(06)6973-7733
近鉄今里駅から徒歩3分
診療時間

受付時間	月	火	水	木	金	土
AM10:00～PM1:00	○	○	／	○	○	○
PM 4:00～PM7:00	○	／	／	○	○	／

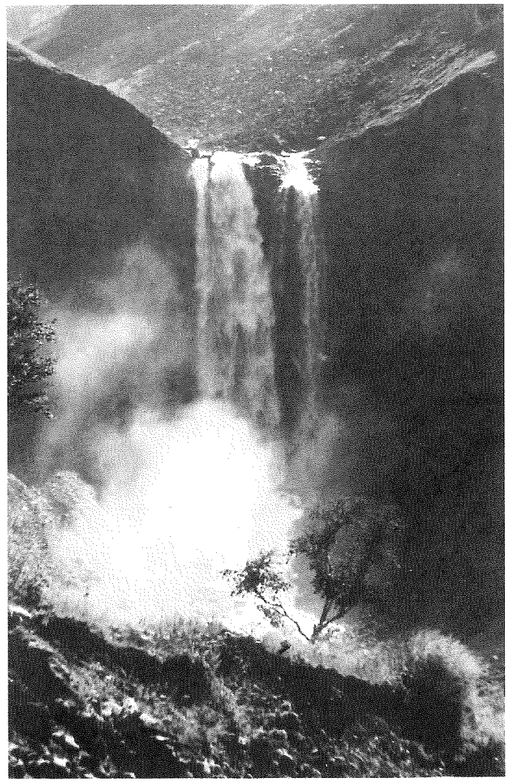
日曜・祝日は休診

中国朝鮮族の聖地 ― 延辺朝鮮族自治州

全 永 男

現在、中国には200 万人になる朝鮮族が住んでいる。140年近い移住の歴史を持っている中国の朝鮮族は、在日、在米の朝鮮人と比べて、その人数が多いばかりでなく、朝鮮民族文化も一番よく守られていると言われている。200万人に上る中国の朝鮮族のうち、80万人は延辺朝鮮族自治州で生活している。延辺は、中国で最も早く民族地域自治を実施した地方の一つであり、また中国で唯一の朝鮮族自治州でり、中国朝鮮族の政治、文化、教育の中心地といわれる。

延辺は、中国、北朝鮮、ロシア三国の国境地域にあり、また世界の有数の秘境である白頭山（中国では長白山という)も、延辺の首府－延吉からバスで４時間ぐらいの中朝国境にある。朝鮮民族の発祥地としても有名な白頭山には、海抜2189メートルに湖面がある神秘の水をたたえた天池のほか、落差68メートルの白頭滝、温泉卵も作れる水温80℃の温泉群、地下森林などの観光地があり、その美しさは、言葉では到底表現できるものではない。それに、白頭山は中国で四つしかない「世界生態環境保護区」の一つでもあって、毎年数十万人に上る国内外の観光客が白頭山を訪れる。



白頭滝

延辺の朝鮮族は、朝鮮語を日常生活の主な言語として使用しており、大部分の子どもも朝鮮族学校で民族教育を受けている。延辺朝鮮族自治州の民族自治条例により、延辺の街の看板には、朝鮮語と中国語の二つの文字が書かれており、延辺の朝鮮族は、ずっと前から自分たちのラジオ局、テレビ局と新聞社を持っている。

延辺の朝鮮族にとって、もっとも重要な名節（記念日）は「６・１子どもの日」と「９・３民俗節」である。どの名節もこの二つの名節の慶祝範囲と盛大さには及ばない。この日になると、延辺の人々は鮮やかな民族衣装を着て、延吉人民公園、帽児山民族村等に集まり、食べたり、歌ったり、踊ったりして、みんなで喜びを分かちあう。特に今年の９月３日は、延辺朝鮮族自治州成立50周年記念日でもあって、州成立50周年を盛大に祝う祭典が準備されている。

延吉で最もにぎやかなところといえば、市内中央にある西市場である。看板にあふれる朝鮮語、市場のなかに響きわたる朝鮮語の洪水、韓国ソウルとは違った、ここはまた知られざる朝鮮語の世界にほかならない。延辺朝鮮族自治州の旅で、朝鮮語の奥深い世界をぜひ体験していただきたい。

（ちょん・よんなむ　韓国語教室講師・大阪大学大学院留学生）

ご支援くださった方々のお名前

（2001年度　2001年４月１日～2002年３月31日　50音順　敬称略）

いつも聖公会生野センターのために、お祈り・ご支援くださりありがとうございます。教会・グループなどで取りまとめてご支援くださった方々のお名前を載せることはできませんでしたが、あわせて感謝申し上げます。

後援会費

相沢牧人　相原太郎　相原俊次　相原吉男　青木恭子　青木礼子　青柳哲夫　青柳正宏　青柳美智子　秋山波子　東直子　東弘子　安達宏昭　アトリエIK　尼子美喜　天野由美　有村一夫　李昌雨　飯田修　井口諭　生野センター横浜教区友の会　池住圭　池本則子　石田浩子　泉迪子　泉田恵美　伊勢田健　井田泉　一花恭子　井出一志　伊藤美佐　稲葉勝也　稲原三千　井上真也　井原洋子　今中冨美子　今中喜子　今西益一　今村祥子　林芳子　岩井梅代　岩井謙治　巌篤子　岩城聡　岩垂悦子　ウイリアムス神学館　植田栄基　植田哲子　植松従爾　松誠　上森稱子　宇野容子　浦川十三夫　江川みつえ　遠藤恵子　大賀健二　大方聡　大川千萬　大木弘行　大黒清一　大阪教区婦人会　大阪聖アンデレ教会婦人会　大阪聖パウロ教会男子会　大阪聖パウロ教会婦人会　大阪聖パウロ教会有志の会　大嶋果織　太田潔　太田淑子　大田美智子　太田喜元　大橋博子　尾形慶子　岡野俊夫　岡野利治　岡本勝　小川博司　小川弥生　興津健蔵　奥晋一郎　奥康功　奥田哲夫　納トヨ　小田原聖十字教会婦人会　小野喬之　小野幸　小野田哲夫　海保正里　垣内久子　葛西良治　梶原史朗　葛城文子　加藤勝弘　金子功　金子みどり　金子保志　金光秀晃　金宮星憲　上岡栄子　香山洋人　軽井沢ショー記念礼拝堂　川上竹治　川口基督教会　川口基督教会婦人会　川越基督教会　姜富三　神崎和子　菊池緑　北原幹子　北山和民　衣笠奈良美　木下勝　金香百合　金秀吉　金必順　鬼本照男　久保道則　久保渕豊彦　倉本和　栗山義信　黒崎晋太郎　河野芳孝・紀子　越賀玲子　越山健蔵　後藤一郎　後藤恵美子　小林克則　小林幸子　小林聡　小林哲也　小林美喜　小松ひとみ　小松二三子　小室一　小山俊雄　近藤悠紀　齊藤祥子　齊藤壹　堺聖テモテ教会　嵯峨崎順子　佐々木聖子　佐治孝典　佐谷和子　佐藤信行　佐野信三　猿橋靖・正子　三光塾　塩田純子　志賀成全　島田麗子　下條道子　社領共美　白石敏子　白石美香　城下彰　鋤柄不二子　杉原達　鈴木育三・恵美子　鈴木璋三　鈴木慰　鈴木眞喜子　清家智光　精神障害者地域生活支援センターすいすい　瀬尾泰大　関戸隆　関本肇　瀬山義美　染井正子　高田日出男　高津達夫・寿江　鷹見作平　高見澤國子　高宮建治　竹下輝　竹中達吾　竹林徑一　竹林敏子　辰巳信義　田中恒久　田中宏　田辺美恵子　田辺聖公会シオン会　谷富夫　谷井尚子　近澤淑子　茶本博史　張聖子　筑田克夫　辻本敏子　辻本秀子　蔦村的子　土屋和則・寛子　坪田敬子　藤間孝子　藤間布美子　東峰多寿　トータス・ハウス　徳田弘幸　富谷晋　冨満美佐子　豊川雅章　豊田英子　富田林聖アグネス教会　内藤義子　中井万三展　中川正信　長崎由美子　中芝永次　中島千恵子　中野香津子　長野加代子　中野武信・直子　中野三枝子　中原恵　中原康貴　中村邦介　仲村實明　中村大蔵　中山一郎　柳堀素雅子　名古屋聖マルコ教会　新村隆一　西川寿代　西台宏　西村逸郎　野田一道　野村潔　芳我秀一　博愛社　橋本克也・玉枝　橋本宣子　橋本みさ子　服部喜代司　服部智子　濱田淳子　春名英夫　坂東長輝　東豊中聖ミカエル教会婦人会　久下克己　飛田雄一　日高和夫　日高八重子　平賀てる子　平野淳子　廣政博　黄裕錫・金幸子　深水君江　吹留辰雄　福岡教会婦人会　福田稔　福永芽久実　藤崎とよ　藤波南美子　藤原紘子　布施操　古川潤兒　古本純一郎　古谷利治　穂積裕子　堀江育夫　堀江富美　洪京子　㈱マイチケット　前川洋子　前田忠男　増岡広宣　益海政一　松居勲　松井新世　松井知子　松岡虔一　松崎純二　松崎澄子　松本一郎　松本潤子　松本文　松本正俊　松本信行　松山龍二　真鍋倫子　三木メイ　水谷博彦　水口正樹　宮川八重子　三宅肇　宮野恵以子　武藤六治　宗像和雄・千代子　村岡美雄　村上喜代子　邑上太杞子　邑上亨　村上義夫　村田洋子　茂木恵　百井幸子　桃山基督教会　森晃一　森美知　守口復活教会　諸橋保夫　八尾恵三　矢城敏一　山口佐栄子　山口瑳智子　山崎ホシ子　山下秀　山田真弓　山根貞夫　山根博子・由香　山野繁子　山本勝彦　山本眞　山本眞美子　山本顕子　湯浅七枝　横浜聖アンデレ教会　吉田孝子　吉田立　吉田常夫　吉田フサ子　吉田雄亮　ヨルダン保育園　良善幼稚園　和田智雄

一般献金

芦屋聖マルコ教会　有田壽　上森稱子　大阪教区連合男子会　大阪城南キリスト教会　大阪聖愛教会　大阪聖パウロ教会　小笠原信実　海保正里　川口基督教会　川口基督教会男子会・婦人会　金鉄雄　草津聖バルナバ教会　小出幸代　猿橋靖・正子　庄内キリスト教会　新生礼拝堂　染井正子　第２４回日韓の歴史を学ぶ会　高木栄子　高津達夫・寿江　高槻聖マリヤ教会　張東煥　日本聖公会中部教区　趙千恵　銚子諸聖徒教会　豊田英子　西川寿代　日本聖公会大阪教区　日本聖公会婦人会　萩ルイ子　橋本宣子　広瀬すみ　プール学院中学校・高等学校PTA　藤崎とよ　宮嶋泰夫　宗像和雄・千代子　桃山学院大学聖救主礼拝堂キリスト教センター　八日市場聖三一教会　吉田立　立教小学校　林間聖バルナバ教会　和田智雄

クリスマス献金

相沢牧人　愛信福祉会　穐山加代　安達宏昭　阿部雅良　天野由美　池袋聖公会　石田浩子　石橋市子　石橋聖トマス教会　伊豆聖マリヤ教会　泉迪子　井田泉　市川聖マリヤ教会　一宮聖光教会　一花恭子　伊藤美佐子　稲原三千　祈りの家教会　今中喜子　林芳子　岩井梅代　上平仁志　恵我之荘聖マタイ教会　江川みつえ　遠藤恵子　遠藤英子　大阪聖アンデレ教会　大阪聖パウロ教会　大阪聖パウロ教会有志の会　太田潔　太田淑子　岡嶋彦一　岡野利治　小川弥生　小野幸　海保正里　釜石神愛教会　神谷尚孝　姜富三　菊地泰次　貴志真一　京都復活教会　清里聖アンデレ教会　草ヶ江幼稚園園児一同　久保篤代　栗井操　栗山義信　神戸昇天教会　神戸聖ミカエル教会　小林いつ子　小林宏治　小室一　齊藤祥子　齊藤壹　佐々木靖子　佐治菊代　札幌キリスト教会　佐野信三　鮫島留美　三光塾　島田麗子　清水聖ヤコブ教会　下鴨幼稚園　首里聖アンデレ教会　城下彰　新庄聖マルコ教会　新生礼拝堂会衆　鋤柄不二子　逗子聖ペテロ教会　鈴木育三・恵美子　鈴木慰　鈴木靖夫　聖アグネス教　聖心幼稚園　聖パウロ教会　聖バルナバ病院サマリア会　聖ルシヤ会　空信一　高宮建治　武市温子　辰巳信義　谷富夫　谷井尚子　千葉復活教会　茶本博史　蔦村的子　坪井喜久　寺村直子　東京聖テモテ教会奉仕会　東京聖マリア教会　内藤昇　中野三枝子　中村大蔵　西宮聖ペテロ教会　初島聖十字教会　早川善樹　林寛子　春名英夫　東松山聖ルカ教会　平野淳子　黄裕錫・金幸子　プール学院中学校・高等学校　深水君江　福岡教会　福永芽久実　藤木典子　藤吉康司　古本純一郎　平安女学院短期大学キリスト教センター　平安女学院中学校･高等学校宗教センター　堀江育夫　前川洋子　松戸聖パウロ教会　松本信代　水口正樹　宗像和雄･･千代子　村片みどり　村上義夫　邨田志津子　村田洋子　目白聖公会　桃山学院聖アンデレ礼拝堂　森中央　八木基督教会　山口瑳智子　山下恭　山田真弓　山根博子・由香　山本顕子　横内洋子　横浜山手聖公会　吉田立　米山勉　立教小学校　立教女学院　良善幼稚園　和田智雄

お知らせ

聖公会生野センター開設10周年記念事業
中国・東北地方　朝鮮族自治州成立50周年祭典参加ツアー

聖公会生野センター開設10周年を記念して中国朝鮮族の旅を企画しました。
共に朝鮮半島にルーツを持つ在日韓国朝鮮人と中国の朝鮮族は同じ「少数者」でありながら、
多くの点で違う歩みをしてきました。
その違いを肌で感じながら、今年しかできない旅を企画しました。
ひと味もふた味も違った旅を楽しみませんか？

日　　時：2002年8月31日（土）～9月4日（水）　4泊5日
旅行費用：168,000円（大阪出発の場合）
主な旅程：白頭山（中国名：長白山）観光
民族詩人尹東柱ゆかりの地訪問
中朝国境観光
自治州成立50周年前夜祭・
記念式典参加　等

白頭山・天池

＊詳しい問い合わせは聖公会生野センターまでお尋ねください。
旅行主催：シーアイティーエスジャパン㈱
国土交通大臣登録旅行業　第587号
旅行取扱：㈱マイチケット（TEL.06-6304-7800）
大阪府知事登録旅行業第3-1816

余韻

◆今号からウルリムの編集を手伝うことになりました。聖愛教会信徒の在日朝鮮人二世です。日本人と朝鮮人・韓国人の相互理解と共生をめざす聖公会生野センターの活動にずっと関心を持っていました。日本社会は物質的には豊かですが、他者に対する無関心さには精神的な貧しさを感じます。ウルリムの紙面から他者を知ること、関心を持つことの大切さを教えられました。あるインタビューでマザーテレサは答えています。「愛の反対側にあるのは憎しみではなく、無関心である」と。立場の弱い小さくされた人たちへの真の連帯を通して、はじめて人が人として解放されるのではないでしょうか。（李裕憲）◆今回から、詩の連載が始まります。作者は聖公会生野センターから自転車で10分ほどのところで飲食店を営んでいらっしゃいます。とても情熱的でかつじっくりと腰を据えて「生きている方だ」というのがお会いした印象です。ウルリムを通して新しい出会いが与えられ、それを読者の皆さんに提供できることが私にとっての大きな喜びです。（ピックアンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail:ikuno.po@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：木　村　幸　夫
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100％の再生紙を使用しています。